

人生という名のミステリー・ツアー

加 藤 俊 英

奨励者紹介[かとう・としひで]

日本キリスト教団北六甲教会牧師

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」

(ヨハネによる福音書 14章1―7節)

西日本献身キャンプのテーマ

本日のお話は「人生という名のミステリー・ツアー」というタイトルをつけさせていただきましたけれども、この「ミステリー・ツアー」という言葉はどこからの引用というかパクったものでございます。もちろん、お話の内容までパクっているわけではなくて、あくまでもタイトルだけなのですが、これは毎年夏に行われている西日本献身キャンプの今年のテーマ「ミステリー・ツアー2018～不思議な出会いを求めて～」からちょっと拝借したタイトルなわけです。

知っている方もおられるかもしれませんが、西日本献身キャンプというのは、同志社大学出身の牧師や同志社関係の教会・信徒が中心となって構成する全国同信伝道会というのがありまして、その略して同信会が主催して同志社大学神学部の後援をいただいて、神学部の先生を講師として行う、高校生を中心とした20歳までの方を対象に行っているキャンプです。今年で70回目を迎えましたので、なかなか歴史があって名称も昔ながらの「献身キャンプ」という名前で行っておりますけれども、目的としては、参加者がそれぞれにこれからの人生の中で、どのようなことを大切にして歩いていくか、あるいは、今、何か思い悩みがあるならば、どのようなことを拠り所として考えていくかということを見出すきっかけにこのキャンプがなればいいなあと考えています。私がキャンプの事務局をしておりますので、20歳までの方で関心のある方はぜひご参加ください。

そして今年の第70回西日本献身キャンプは、8月の半ばに同志社びわこリトリートセンターで2泊3日で行いました。テーマは先ほども言いましたように「ミステリー・ツアー2018～不思議な出会いを求めて～」です。もしかしたら、参加した方々は「ミステリー・ツアー」というから、どんなヤバい場所に連れて行かれるのだろうと警戒していたかもしれませんが、リトリートセンターの敷地内だけで完結したプログラムで

した。

今年の意図としては、私たちは人生の中で、自分の将来を知ることができず、人生の岐路と思えるところに立つ時、とても不安や恐れを抱くもので、それこそ私たちの人生は先が見えないミステリー・ツアーであるけれども、しかし、それは実は神に良きものとして備えられている、ミステリーは日本語で「神秘」と訳されるけれども、まさに一人ひとりの道は神にしっかりと用意されていて、その中で神との出会い、人との出会いというものも用意されているのだということをテーマへの思いといたしました。

神は人生の苦しみにどう関わるのか

献身キャンプにおいてそのような希望というものをお伝えしたかったわけですが、しかし、もう少し考えてみれば、私たちの人生は順風満帆ではありません。時として苦しみや痛みで満ちたもの、人との出会いがその人が抱える苦しみや痛みとの出会いということもあり得ます。人との出会いは、同時に、その人が抱えている、あるいは取り組んでいる労苦・苦難との出会いでもある、そのようなことも多くあります。ある人は差別の中での苦しみ、また、ある人は政治がもたらす問題の中で苦しみ、ある人は病の中での苦しみ、あるいは介護、人間関係、貧困、例を挙げていけばきりが無いほど、私たちが生きている世界・社会にはさまざまな労苦・苦難が存在することを知らされる思いがします。ではその時に、神は私たちに道を備えるだけなのか、私たちが人生という道の中で苦しみや痛みを感じる時にどのようにかわるのかとも思うわけです。

献身キャンプの前の週と次の週、私は教会から休みをいただきまして、広島県三原市というところを訪ねました。私は同志社大学神学研究科に2006年4月に入学して牧師になるための勉強を始めたのですが、それ以前の8年間で家族3人で住んでいたのが広島県三原市です。7月に西日本では大変な豪雨被害があり、岡山県や広島県、愛媛県などの被害が大きく報道されておりますけれども、実は広島県三原市の被害はなぜかほとんど報道されてはいないのですが、三原市本郷地区は2メートルを超える高さでの浸水被害がありました。私の住んでいた地域ではないのですが、三原市には親しい方々も多くおり、その方自身の状況、あるいはその方の知り合いの状況などいろいろお話を聞いたのですけれども、元の生活に戻れる見通しの立たない方々が多くいらっしゃいます。家屋が無事だったとしても、泥水の中で家財道具や思い出の品々を失い、これから生きていく気力が湧かないとおっしゃる70代・80代の方もいらっしゃいました。得てして、わたしたちの人生の中で、このようなことが起こり得るわけです。自分がそのような災害に遭わなかったとしても、その方々のために何ができるのだろうかと思ってしまうわけです。

共に苦しむ神という衝撃

今日みなさんとお読みしたヨハネによる福音書は紀元90年代ごろ、イエスの十字架と復活という出来事があってから約60年が経過した時点で書かれたと考えられます。そのヨハネによる福音書の直接の読み手であったキリスト者たちは宗教的にも社会的にも命にかかわるような苦しみの中にありました。それらの読み手に対してヨハネによる福音書記者は伝えるわけです。すでに十字架上での苦しみを受け復活したことを人々が知っているイエスの言葉として伝えていきます。「心を騒がせるな」。「わたしは道であり、真理であり、命である」。そしてこの言葉は現代に生きる私たちにも向けられているのです。

とか言うと、牧師という人種や宗教家というものは、そういうリアリティの無い言葉でごまかそうとする、無理矢理に納得させようとすると思われることでしょう。言っている私だってそう思います。しかし、ヨハネによる福音書の直接の読み手であった人たちは、このイエスの言葉をリアリティある言葉として受け取ったようです。これが当時の読者にとって、どれほどのインパクトのある言葉でありリアリティのある言葉だったのかということは、キリストの十字架上での苦しみと復活という言葉が散々聞いてきた私たちにとって、その衝撃の度合いというのは、もしかすると分かり得ないのかもしれませんが。

ローマの信徒への手紙など新約聖書中の書簡ではたびたび神の「秘められた計画」という言葉が使われていますけれども、かつて旧約聖書の時代、聖書の神は人間にとって秘められた神でありました。さまざまな苦難の現実の中を歩む人間は絶えず、神は今どこにいるのか、神は私たちの現実を知っているのか、私の苦しみ痛みを知っているのかと問うていた、そのような状態の中に何千年もの間、あったわけです。折々に人間に働きかけてくださるけれども、遠く離れた神だったわけです。そのような状態が一変する出来事がもたらされた、それがキリストです。遠く離れていないどころではなく、現実の中にいつも共にいる、私たち人間が日ごとに負う苦しみ痛みを共に経験する神が、今、私が感じている苦しみを神が知っており、神が共に苦しみ痛むということは現代の私たちが想像もできないほどのインパクトをもって受け止められたのだらうと思います。今、私が負っている苦しみを、神はその身をもって知っている、神が共に負っている、こんなに嬉しいことはないという喜びです。

ミステリー・ツアーの同行者キリスト

確かに今もって私たちの将来、人生という名のミステリー・ツアーは秘められた計画かもしれない。しかし、確かに知らされているのは、そのツアーには同行者がいるということです。私たち一人ひとりの人生という名のツアーの中で経験する苦しみや痛みをすでに経験し、その苦しみや痛みを共に負う同行者がいる。それがイエス・キリストである。私たちの人生というツアーは確かに神へとつながっており、そしてそのツアーには確かに苦しみや悲しみ、辛さといったものが伴うものであるけれども、しかしそのツアーは決して孤独な暗闇の中を歩くツアーなのではなく、イエス自身が道であり、導き手であり、共に苦しみや痛みを負ってくださりながら、光に満ちたものなのだとすることを日々思い起こしながら歩んでいきたいと思えます。

2018年9月26日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録